

「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」

玻璃彩 News

h a r i s a i

第7回研究会報告

◎講 話◎

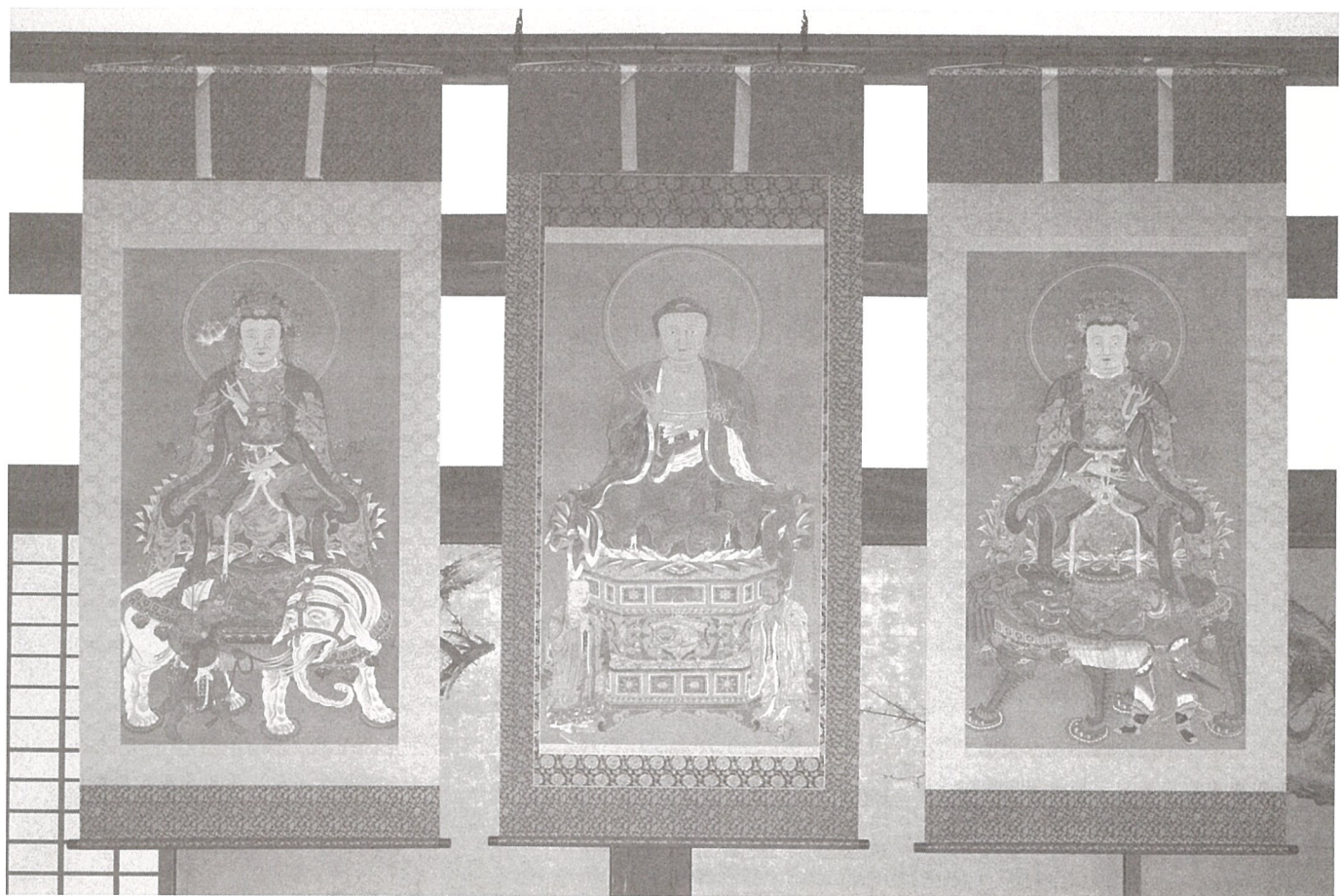
相国寺と若冲、そしてコロタイプ

臨済宗相国寺派管長 有馬頼底猊下

◎講 演◎

オリジナルと複製—機械と人間

東京藝術大学 佐藤道信氏



「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」

第7回研究会

「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」第7回研究会は平成19年7月21日、工房見学を京都・便利堂にて、また研究会は会場を相国寺書院に移し開催されました。

臨済宗相国寺派管長有馬頼底猊下のご講話の後、東京藝術大学佐藤道信氏にご講演いただき、その後コロタイプ工房・山本修氏によりコロタイプ版伊藤若冲筆「釈迦三尊像」制作過程、と題して現在までの釈迦三尊像・動植綵絵全33幅への取り組みの過程が報告されました。

【工房見学】

研究会に先立ち、恒例となりましたコロタイプ工房見学が行われました。今回は38名の方々にご参加いただき、コロタイプ作業の流れに沿って、実際に作業をしている撮影・製版・印刷の各部署にご案内しました。「釈迦三尊像」の複製に使用した製版フィルムや、刷りをご覧いただき、疑問点などは技術者に直接質問してもらいながら、工房で練りひろげ



られるコロタイプ技術を体感していただきました。

【第7回研究会】

約80名もの会友の皆様にご参加いただいた第7回研究会は、臨済宗大本山相国寺様の多大なご協力により、書院を会場に、そして複製の展示もさせていただきますました。

相国寺様ではこの度、開基・足利義満公の600年忌を記念して伊藤若冲筆「動植綵絵」30幅の約120年ぶりの里帰りが実現し、承天閣美術館に「釈迦三尊像」3幅と共に並べられました。

その一方で複製も進み、現在「釈迦三尊像」3幅が完成しています。この「釈迦三尊像」「動植綵絵」



三井記念美術館館長 清水眞澄氏



コロタイプ版「釈迦三尊像」が掛けられた研究会会場 書院にて

複製を通して、文化財複製の単なる印刷技術としてではない技法のひとつとして「コロタイプ」が持つ意味をテーマにいたしました。

会場には、お納めした「釈迦三尊像」3幅を展示させていただき、再現された若冲の世界を間近でご覧いただきました。

会の始まりにあたり、三井記念美術館館長清水眞澄氏より「会が発足して約3年半になりますが、人の手から生みだされる心のこもった素晴らしい出来映えのコロタイプ印刷を手にする感動は、今も変わりません。会友が400人を越えたということは、それだけ理解者が増えていくということで大変喜ぶべきことです。」と、ご挨拶いただきました。

講話

臨濟宗相国寺派管長有馬頼底管下に、「相国寺と若冲、そしてコロナタイプ」をテーマにお話ししていただきます（以下、抄録を掲載いたします）。

伊藤若冲が両親や弟、自分自身の永代供養として相国寺に寄進した「動植綵絵」30幅「釈迦三尊像」3幅は、明治22年に「動植綵絵」が皇室に献上され、以来宮内庁三の丸尚蔵館と相国寺に別れて所蔵されて参りました。今回、開基・足利義満公600年忌という節目にかねてからの願いである「動植綵絵」約120年ぶりの里帰りが実現いたしました。

かねてから考えていることに、各地の史跡にあるもの、寺院に収蔵してあるものなどは社会情勢の変化によって様々に移転していき、移動していくという現実があります。ある意味、それがどこにあるう



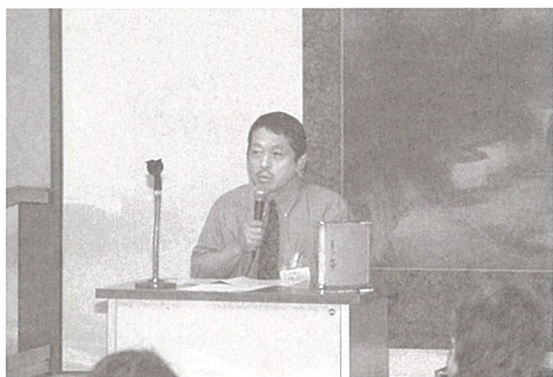
臨濟宗相国寺派有馬頼底管長

と大切に保存、管理されていれば何も問題がないようにも思えます。しかし、違うのです。やはりあるべきものはそこに無くてはいけないのです。「釈迦三尊像」あつての「動植綵絵」、「動植綵絵」あつての「釈迦三尊像」、若冲あつての相国寺。里

帰りを必ず実現したかった。そして、遺しておかなくてはならない。遺すためには文化財を複製する技術を持つ「コロナタイプ」に頼らざる得ませんでした。5年後の完成を皆さんと楽しみに待ちたいと思います。

講演

続いて、東京藝術大学 佐藤道信氏より「オリジナルと複製—機械と人間」をテーマにご講演いただきました。佐藤氏は、「コロナタイプ」は機械化された印刷の一種だと考えられていたそうですが、実際に目にした工房は限りなく手作業であり、「版



東京藝術大学 佐藤道信氏

画」であるという認識に変わられた、ともお話しされています。

もともと人の手で行われてきたことが機械化が進む過程で、何が機械に置き換えられ、何が置き換えられなかったのか。一見同じものでも、人間の手がどれだけ介在しているかでその価値は変わってくる。そのなかで「コロナタイプ」は「刷り」か「印刷」か、「オリジナル」か「複製」か。そしてその複製にアウラはあるのか（魂は宿るか、拝めるのか）。現実に「コロナタイプ」が直面している問題の核心をつく内容でした（「玻璃彩」7号に講演録を掲載予定です）。

懇親会

研究会終了後、京都ブライトンホテルに会場を移してご出席の皆様と懇親を深めるひとときを持ち、盛会の内に終了いたしました。



コロタイプ版

伊藤若冲筆「釈迦三尊像」制作過程

便利堂コロタイプ工房 山本修氏

「釈迦三尊像」3幅の複製制作過程を今回は、単なる技法説明としてではなく、活動日記風にお話しさせていただきます。

撮影 平成18年5月29日。相国寺様より釈迦三尊像をお借りして、当社写真工房にて撮影いたしました。この日から、コロタイプ版釈迦三尊像・動植綵絵全33幅の制作がスタートしました。

色チェック 撮影終了後、入念な色チェックが行われました。背景色が独特で（裏彩色と思われる）、従来の色見本の上に絵の具をのせる方法で色を記録しました。

レタッチ 鉛筆や墨、マスクフィルムを使用してネガを正しい調子に整えます。釈迦三尊像は非常に大きい為、その数は合計128枚に達しました。

色の取り出し すべての色を個別にネガから取り出し、不要な部分を覆い隠します。色の取り出しは完全な手作業です。5人の製版担当者が、レタッチ作業と合わせて5ヶ月もの時間をかけ、原本に忠実な色の取り出しを行いました。



版を作る 釈迦三尊像の版は大きく、2人がかりの作業になりました。ガラス板にゼラチンと感光液を塗布し、2人息を合わせて版を左右に振り均等に液を引きます。ゼラチン版は、一度使用するともう翌日には使用できません。校正刷や本刷の間、毎日新しい版を作り続け、その数は実に400版以上になりました。

焼き付け 完成したゼラチン版とネガを密着させ、紫外線を照射して焼き付けます。

刷り作業 平成18年9月1日初校刷を開始。その後、校正刷を重ね、40日後の10月11日に「普賢菩薩像」から本刷をスタートしました。刷り作業終了は、平成19年3月2日でした。全てが手刷りのため、初校刷から刷了まで5ヶ月余りの作業日数を必要としました。

手彩色 刷り上った釈迦三尊像に川面美術研究所の日本画家の手で延べ40日をかけ、仕上げの手彩色が入ります。

相国寺様色見 平成19年2月21日。完成したコロタイプ版と原本の釈迦三尊像とを承天閣美術館に並べ、有馬管長様をはじめお寺の皆様にご覧頂きました。そして表具の許可を頂きました。

お納め 平成19年6月1日。相国寺様に「釈迦三尊像」3幅を無事ご納品させて頂きました。撮影の日から367日目の事でした。

第8回研究会ご案内

「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」第8回研究会は平成19年11月頃に東京での開催予定です。文化財保存の観点からの「原本にかわる複製」に「コロタイプ」をどう活かしていくかをこれまでに頂戴したご意見をふまえ、より深く課題を掘り下げられるよう内容を検討中です。詳細は決まり次第改めてご連絡いたします。

お知らせ

活動報告改善の一環として、今回より「玻璃彩News」をお届けいたします。会友の皆様により迅速に研究会報告をお知らせするのが目的です。年に2回、研究会開催後に発行する予定です。会報「玻璃彩」は、さらに紙面の充実をはかって年に1回の発行といたします。次回7号は来年春の発刊を予定しています。活動に対するご意見や会友寄稿など、ぜひ事務局までお寄せください。

会友名簿最新版も合わせてお送りいたします。会友数はこの8月で463人に達しました。多くの会友の皆様を支えられ本会も4年目を迎えました。もともとっとたくさんの方々にコロタイプを知っていただき、会友数4ケタを目指し活動していきたいと思っております。今後ともご協力お願いいたします。

「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」会報
「玻璃彩 NEWS」1号

平成19年9月25日発行

発行

「コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会」事務局
京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町三〇一 一番地 株式会社 便利堂内
電話075(231)4351
colo-net@benido.co.jp http://www.benido.co.jp

制作——株式会社 便利堂